にかきつけました。
昼からになって配達がすむと、今度は店番です。つぎからつぎと、いろんなお客がやってきます。
「なるべく上等なやつをいろいろまぜて、これだけかごにつめてくれ。ていさいよくのしをつけて。」
そういって、新しい札をポンとなげだす人もあります。かと思うと、一山いくらのところあれこれと見まわってから、ごそごそと帯の間から財布がわりの封筒をとりだす、みすぼらしいおばあさんもあります。
「きんかん、これだけおくれ。」
そういって、いくらかの銅貨を店さきになげだす子どももありました。
そういうお金のなさそうな人をみると、要吉は、うんとまけてやりたい気がしました。どうせ、売れ残ればすててしまうのだもの、買いたくっても買いたくっても買えないような人たちには、どしどしたくさんやったらよさそうなものだと思いました。しかし、そんなことをしようものなら、主人やおかみさんに、しかられるだけならまだしも、こッぴどい目にあわされるにきまっています。
いつか、きたないなりをして、髪をもじゃもじゃにしたそれはそれは小さな女の子が、よごれた風呂敷づつみをぶらさげて、店の前にたっていたことがありました。それは、朝鮮あめを売って歩く子だったのです。女の子は、いかにもほしそうに、店の品ものをながめていました。
要吉は、かわいそうになったものですから、いきなり、きずもののバナナをひとつかみつかんで、

女の子にもたせました。と、奥からでてきたおかみさんが、ふいに要吉をどなりつけました。
「なにをしてるんだい。」
「え、あの、ローズものを少しやったんです。」
「よけいなことをおしでないよ。」おかみさんは、いきなり、うしろから要吉のほッぺたをぴしゃんとなぐりつけました。「やってよけりゃア、わたしがやるよ。……そんなことをした日にゃア、店の品もんが安っぽくなってしようがないじゃアないか。」
要吉は、そんなことを思いだすと、みすみすすてるもんだとは思いながらも、貧乏なおばあさんや子どもに対しても、みかんひとつまけてやることができませんでした。
要吉は、なんということなく、毎日毎日の自分の仕事がつまらなくなってたまらなくなるのでした。
要吉は、また、ある日、おやしきへ御用聞きに行きました。すると、ちょうどお勝手口へでていた女中が、まッ黒くなったバナナをごみ箱へすててていました。
「おや、どうなすったんですか。こないだお届けしたのは新しかったはずですが。」
要吉は、びっくりして聞きました。
「なアに、これは、もうせんにとっといたのよ。」と女中はいいました。「到来ものやなんかが多くって、奥でめし上がらなかったもんで、しまっといてくさらしちゃったのさ。」